修士論文（要旨）
2011年1月

人格特性とリスクテイキングの関連について
－Torgersen`s　8 personality typesからの検討－

指導　森　和代教授

心理学研究科
健康心理学専攻
209j4054
江藤　佑

目次

1. 問題と目的
　1. 1　アイゼンクによる人格理論
　1. 2　リスクテイキング行動

2. 予備調査

3. 本調査

4. 結果と考察

参考文献

資料1　予備調査で使用した質問紙
資料2　本調査で使用した質問紙

1，問題と目的

1.1　アイゼンクによる人格理論

彼の理論で特徴的な点は､その後に続いた研究が実験心理学や身体心理学の分野で多く取り上げられたことである．その点で、心とともに身体が健康にとって重要なファクターであると捉えている健康心理学の分野においても、アイゼンクのパーソナリティ理論は密接な関連があると推測される．また日本では辻ら(1989)が翻訳、作成したEPQ (Eysenck Personality Quetionaire, 1989)があるが、結果は満足のいくものではなく，多くの問題が指摘されている．

そんな中、Torgersenのパーソナリティ理論は類型論と特性論を結合した形であるとして、現在注目を浴びている．Torgersen (2000) は、アイゼンクのBig Three理論を前提に、各3因子別で、それぞれの中央値から高低を判別し、各因子の高低の組み合わせにより人格を8つのタイプに選別した．

1.2　リスクテイキング行動

Jessor (1998) は、リスクテイキング行動とは直接的あるいは間接的に、幸福、健康、さらにはライフコースまでをも危険にさらしうる行動のことであり､健康心理学のなかでも重要なファクターである．小塩(2001)は、因子分析から青年期のリスクテイキング行動を個人的リスク行動と社会的リスク行動の2因子で構成されるとし､それらを測る尺度としてRIBS-Uを作成した．こうしてさまざまな側面からリスクテイキングは研究されてきたが、リスクテイキングとパーソナリティの関係を調査した研究はあまりされていない．またリスクテイキング行動は個人のパーソナリティと関連があると想定される．現在、欧米のパーソナリティ研究では、Torgersenが確立した8つの類型と青年のリスクテイキングの関連についての研究が徐々に増えてきている．上記の研究は、この類型論がリスク行動の予測について有効なアプローチであることが示唆しており､健康心理学の分野においても密接な関連性があると推測できる．しかしながらわが国で上記のようなパーソナリティ理論からのアプローチに関する研究はまだなされていない．よって本論文では､アイゼンクのパーソナリティ理論を基に、それぞれの因子が独立し、頑強で、よりクリティカルなパーソナリティ尺度を開発し、Torgersenのパーソナリティ類型方略に則った日本版Torgersen`s 8types personalityを作成し、リスクテイキングとの関連性を検証することを目的とした．

2、予備調査

予備調査では、Torgersenのパーソナリティ理論の中の下位因子である「精神病傾向」に準拠し、日本の文化や社会に適合的な質問項目を抽出することを目的とした．調査協力者は心理系の大学生及び大学院生14名（男性4名，女性10名，平均年齢=21.71、*SD*=3.89)、2010年7月中旬頃に調査を行った．調査内容はアイゼンクのパーソナリティ理論の特性部分である精神病傾向の下位因子について,その行動を行う人物が人格面及び行動面でどのような特徴があるかという問いに対して自由記述で回答してもらった.所要時間は約10分であった.

3、本調査

被調査者：関東の大学生308名(男性94人，女性214人，平均年齢=20.72，*SD*=4.97)

調査時期：2010年10月から12月

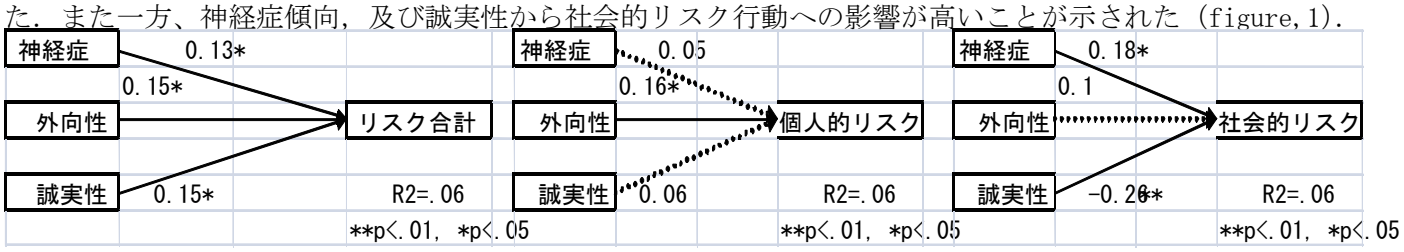
手続き：大学の講義休憩時間内及び終了後に作成した質問紙を配布し、即時または後日回収した.

質問紙構成：１、パーソナリティ尺度：辻らのEPQ (1989) から神経症傾向、外向性、精神病傾向（誠実性）の因子負荷量が.400以上の特に高い項目を,現在の日本の文化や社会に適合的な質問内容に修正した25項目と、予備調査で新たに抽出した5項目,そしてLie尺度として組み込んだ2項目を合わせた計32項目の質問尺度.２、リスクテイキング測定尺度：リスクテイキングを測る尺度として大学生リスクテイキング行動尺度（小塩,

2001）12項目．３、パーソナリティ尺度：和田のBIG　Five尺度（1984）の中の神経症傾向，外向性，誠実性の各因子から尺度内の因子パターンが高い項目を4項目抽出した計12項目．

４、結果と考察

本研究では、パーソナリティとリスクテイキング行動の関連性を調べるために、まずBig Three理論の流れを汲むパーソナリティ特性理論の先駆者であるアイゼンクが作成したEPQ尺度をもとに、よりクリティカルなパーソナリティ尺度を開発するために予備調査を行った．その結果、現在の時代背景や文化にあった精神病傾向の質問項目を抽出した．次に本調査では、予備調査で抽出した項目を加えた三因子パーソナリティ尺度の因子分析を行った結果、全ての項目は、想定された因子に高く負荷しており，その因子負荷量は単純構造を示した．15項目による全分散のうち3因子によって説明できる割合は50.42％であり，またα信頼性係数はそれぞれ0.791，0.750，0.620と，比較的高い値が得られ，3つの因子について十分な内的整合性が示された．因子名はそれぞれ神経症傾向、外向性、誠実性とした．分析では、まずリスクテイキング得点と性差に有意な差が見られ、男性の方が女性に比べリスクテイキング行動を起こす傾向があることが示された（リスクテイキング行動合計得点；$t(94,214)=5.39$，$p<.001$，個人的リスク行動得点；$t(94,214)=6.80$，$p<.001$，社会的リスク行動得点；$t(94,214)=2.39$，$p<.05$）．さらにパーソナリティの3特性（神経症傾向、外向性、誠実性）とリスクテイキング行動得点の重回帰分析を試みた結果、外向性から個人的リスクテイキング行動への影響が高いことが示された．また一方、神経症傾向，及び誠実性から社会的リスク行動への影響が高いことが示された（figure,1）．



Figure,1　各リスクテイキング行動に対する重回帰分析の結果

さらに個人的リスクテイキング行動に関して、神経症傾向、及び外向性が高いタイプ（N+E+C-型、N+E+C+型）は個人的リスクテイキング行動を起こす傾向があり、反対に外向性が低く誠実性が高いタイプは個人的リスクテイキング行動をとらない傾向がみられた．さらに、社会的リスクテイキング行動に関しては、神経症傾向が高く誠実性が低いパーソナリティタイプ（N+E+C-型、N+E-C-型）は社会的リスクテイキング行動を起こす傾向がみられ、反対に神経症傾向が低く誠実性が高いパーソナリティタイプ（N-E-C+型、N-E+C+型）は、社会的リスクテイキング行動をとらない傾向がみられた．以上から、今回の8つのパーソナリティタイプからのアプローチは、リスクテイキング行動を捉える上で、非常に有効であったといえる．

今後の展開としては、8つのパーソナリティタイプの量的調査に加え質的調査を行い、各パーソナリティタイプの具体的な性格的特徴や具体的背景に焦点を当て、8つのパーソナリティタイプの内容を紐解いていくことが必要であると考える．さらにそれに加えて、喫煙行動や過度の飲酒など個々のリスクテイキング行動に焦点をあて，リスクテイキング行動の始めた動機や開始時期、継続年数、行動頻度など更に研究を進めていく．

今後の課題としては、今回は先行研究に従い，各性格特性の中央値から特性の高低を判別し，組み合わせた．しかしサンプル数や地域，年代の偏りなどによって中央値がぶれてしまう恐れがある．そのためにもEPQ修正版の各特性の統計的に正確な標準値を算出し，そこから高低を判別しなくてはならないと考える．以上のように、諸処の反省点を踏まえつつ、さらにパーソナリティとリスクテイキング行動の関連性と、それにかかわる疾患への予防等を含めた具体的内容に焦点を絞り，さらなる応用的研究を進めていく．

参考文献

オルポート, G.W.詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正（訳）（1982）. パーソナリティ―心理学的解釈― 新曜社

安念 保昌（2007）.進化的パーソナリティ論, 瀬木学園紀要 1,10, 3- 12

アイゼンク,H.J. &,D.K.B.ナイアス 著 ; 岩脇三良 訳(1982). 性・暴力・メディア : マスコミの影響力についての真実 , 新曜社

アイゼンク,H.J.著 ; 清水善治［ほか］訳監訳(1993). たばこ・ストレス・性格のどれが健康を害するか : 癌と心臓病の有効な予防法を探る , 星和書店

アイゼンク,H,J. 梅津耕作訳（1973）.人格の構造―その生物学的基礎, 岩崎学術双書

平岡 敦子・青谷 恵利子・津島 ひろ江（2003）.若者における性感染症の実態と性教育の課題, 川崎医療福祉学会誌, 13, 1, 123- 127

Hochwalder, J. (2009). Burnout among torgersen`s eight personality types , SOCIAL BEHAVIOR AND PERSONALITY, 37,4, 467- 480

藤島 寛・山田 尚子・辻 平治郎（2005）.5 因子性格検査短縮版(FFPQ-50) の作成,パーソナリティ研究, 13, 2 231- 241

石毛 みどり・無藤 隆（2006）. 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連, パーソナリティ研究, 14, 3, 266- 280

Jakson, J. S. & Katherine M Knight, K. M. & Rafferty, J. A.(2010). Race and Unhealthy Behaviors: Chronic Stress, the HPA Axis, and Physical and Mental Health Disparities Over the Life Course. American Journal of Public Health. 100, 933- 940

Wilkerson, J. M. & Brooks, A. K. & Ross, M, W. (2010).Sociosexual Identity Development and Sexual Risk Taking of Acculturating Collegiate Gay and Bisexual Men. Journal of College Student Development. 51, 3, 279-297

鎌花 一巳(2000).運転時のリスクテイキング行動の心理的過程とリスク回避行動へのアプローチ, 国際交通安全学会誌, 28, 1, 12- 22

上市秀雄・楠見孝(1998）.パーソナリティ・認知・状況要因がリスクテイキング行動に及ぼす効果 心理学研究, 69, 2, 81- 88

門田昌子・寺崎正治(2005). パーソナリティと主観的幸福感との関連- 対人相互作用におけるソーシャル・スキルの役割 -川崎医療福祉学会誌, 15, 1, 67- 74

北折 充隆（1999）.歩行者の交差点における信号無視行動とその態度との関連について―公的・私的自己意識も踏まえて―, Bulletin of the School of Education, 46, 197- 204

国里 愛彦 ・山口 陽弘 ・鈴木 伸一（2007）.パーソナリティ研究と神経科学をつなぐ気質研究について, 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 , 56, 359- 377

楠本 久美子・江原 悦子・岡田 潔（2005）.米国の性意識,性行動及び性教育の動向とわが国の課題, 四天王寺国際仏教大学紀要,4, 157- 162

Vollrath, M. & Torgersen, S. (2002). Personality types and coping, Personality and Individual Differences, 29, 367-378

Vollrath, M. & Torgersen, S. (2002).Who takes health risk? A probe into eight personality types, Personality and Individual Differences ,32, 1185- 1197

松尾 太加志（2007）.心理実験におけるリスクテイキング行動と日常リスク認知との関係, 北九州私立大学研究報告, 1- 4

宮城 真理・茂 隼人（2009）.禁煙教室を受講した高校生の喫煙行動とエゴグラムの関連 日本禁煙学会誌, 4, 3, 72- 77

村松 常司・村松 薗江・秋田 武・片岡 茂雄・金子 修乙（1995）.青年期女性の喫煙習慣とライフスタイルに関する研究 愛知教育大学研究報告, 44, 75- 86

村上 宣寛・村上 千恵子（1997）.主要因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, 6, 1, 22- 39

Jackson, N. J. & David B. (2002).Inhibition of Antisocial Behavior and Eysenck`s Theory of Conscience, EDUCATION AND TREATMENT OF CHILDREN, 25, 4, 522- 531

小俣 謙二（1998）.大学生の自室へのひきこもりに関与する住居および心理要因の検討日本家政学会誌 Vol, 49 77～87

岡部 康成・今野 祐之・岡本 浩一（2003）.安全確保のための心理特性の潜在的測定の有用性, 社会技術研究論文集, 1, 288- 298

小塩 真司（2001）.リスクテイキング尺度（RIBS-U)の作成 名古屋大学紀要, 48, 257- 265

Costa, P. T. Jr. & McCrae, R. R. (1992). Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five-Factor Inventory(NEO-FFI) professional manual. Odessa

齋藤 崇子・中村 知靖・遠藤 利彦・横山 まどか（2001）.性格特性用語を用いたBig Five尺度の標準化, 九州大学心理学研究 , 2, 135- 144

瀬戸正弘・高田清香他（1998）.喫煙動機評価尺度（RSAS）の作成ならびにニコチン依存が喫煙のストレスコーピングとしての役割に及ぼす影響 早稲田大学人間科学研究, 11,1

柴田 由己（2008）.青年用刺激希求尺度の信頼性・妥当性の検討, パーソナリティ研究, 16,2, 198-208

島村 陽一・関口 洋美・工藤 力（2006）. 欺瞞尺度開発に向けての発展的研究（Ⅱ）―パーソナリティタイプと嘘行動との関連―, 大阪教育大学紀要, 4, 55, 1, 101- 107

島 義弘（2007）. 青年期の愛着とBig Five ―日本人サンプルでの検討, パーソナリティ研究, 16, 1, 121- 123

下仲順子, 中里克治, 権藤恭之(1999). NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理

進藤 眸（2004）.非行性の認定（Ⅵ）非行性の概念の統一化 その２ 非行性尺度の分析機能から, 人間科学研究, 26 105- 114

進藤 眸（2003）.非行性の認定（Ⅴ）非行性の概念の統一化 その1 非行性尺度の予測機能から, 人間科学研究, 25 13- 23

進藤 眸（2002）.非行性の認定（Ⅳ）実態調査 その２ 非行性を構成する下位要因, 人間科学研究, 24, 97-107

多々納 秀雄・徳永 幹雄・橋本 公雄（1985）.喫煙行動の形成・変容過程に関する考察, 健康科学, 7, 11- 27

辻 平次郎・加納 真美（1989）.日本版EPQ (Eysenck Personality Questionaire)作成の試み,甲南女子大学紀要 26,59-80

山田 尚子（2000）. パーソナリティ研究の動向と展望, The annual report Educational Psychology in Japan, 39, 70-77

和田 さゆり（1996）.性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究, 67, 1, 61- 67

渡邊 淳子（2009）.嗜癖に見られる人間の不合理性の研究―欲望の連鎖とパーソナリティの成熟―, 熊本大学大学院博士論文